

宗教心理学者としての池田大作…その素描

キム
ジェヨン
金 在 榮

はじめに

本日、私は「宗教心理学者としての池田大作」に光を当てたいと思います。もしかすると、池田氏の思想と業績についての解釈としては、これは皆さんにとつて耳新しいものかもしれません。これまで日本と外国の研究者が氏をどのように見てきているのかを、まず確認しておきましょう。たとえば、井上順孝、島蘭進、イアン・リーダー (Ian Reader)、ジョージ・ミラー (George D. Miller) の各氏からです。研究者の中には、池

田氏を「新しい宗教運動の創始者」と呼ぶ人もいますし、「仏教哲学者」とする人もいます。また、「教育家」「思想家」「詩人」という表現もよく聞きます。ときには「平和の建設者」「異文化間対話の推進者」「国際的な世界市民運動の促進者」と見なされます。「政党の創立者」でもあり、さらには宗教改革者のな在家仏教徒として、ある意味で現代における「仏教界のマルティン・ルター」のような存在とさえ考えられています。

きょうは、はじめに、私がどのようにして池田大作氏を宗教心理学者として研究することに関心もち始

めたのかをお話ししたいと思います。その後、宗教心理学の分野の創始者であるウィリアム・ジェイムズ (William James 一八四二—一九一〇年) と池田氏の類似性に、話をしばってまいります。いま述べたように、私は友人の研究者を通して、池田氏と創価学会インタナショナル (SGI) について、すでにいくばくかの見解をもっていました。それに加えて、氏が書いた、あるいは氏について書かれた文章によって、氏とSGIに対する私なりのイメージをつくってしまいました。しかしながら、本日の話の準備のために、氏とSGIについて読み、探究するにつれて、氏に対する私の学問的理解と意見は少しずつ変化しました。それが何なのかを、皆さんにご紹介したいと思います。

知的関心の進展

池田氏とウィリアム・ジェイムズの比較において考慮する必要があるのは、「人間革命」あるいは「人間の変革ないし内的変容」という概念です。つまり、内的な変化がどのようにして外的な変化を導けるのか、そ

の展開のプロセスへの関心であり、これは「自己」についての理解の問題と関連しています。自己をどのように理解しうるのか、それを考察することが、両者の関心事の親和性を探究する際のきわめて基本的な課題だと思っています。

宗教研究の世界において、非常に重要な問いがいくつかあります。すなわち、宗教をどこで学べるのか、いかに学べるのか、そして宗教の世界から何を学べるのか、これらに関する問題です。他の諸宗教についてより深く理解するには何が必要か——これに関して、真つ先に私の頭に浮かぶのは、宗教間対話研究の最高峰と私が考える人物、ウイルフレッド・キャントウエル・スミス (Wilfred Cantwell Smith 一九一六—二〇〇〇年) から学んだことです。彼によると、私たちが宗教を考えるとき、自分が身をもって行う人格的理解こそがきわめて重要な要素なのです。研究中の宗教について、「その信奉者との」絶えざる対話、絶えざる接触、絶えざる意思の疎通を通じて、より生き生きと感得できるのだとスミスは強調しました。このことを私は自分

の現在の研究で実地に経験しました。池田大作氏とSGIについて研究するにあたって、はじめ私は、ただ概念的な観点と組織の機構を通して理解しようとしていました。しかし、SGIメンバーとの一対一の出会いを重ね、また彼らが池田氏の作品を通して氏と結ばれている姿を知ることによって、スマイスが強調した「生きた宗教理解」を私は感じられたのです。

それに加えて、ジョン・デューイ研究の中心的存在の一人であり、私の長年の友人であるラリー・ヒックマン (Larry A. Hickman) も、SGI運動と三代までの会長の研究をしており、彼の著作もまた、池田氏とSGI運動を深いレベルで理解するように私を促してくれました。さらに、ハーヴィ・ロックス (Harvey G. Cox) ——彼は宗教における進歩主義者と保守主義者の双方を理解している神学者です——彼のおかげで、私はよりバランスの取れた見方ができるようになりました。

これら三人の学者が共通してもっている関心事は、「宗教をどう理解すべきか」そして「宗教から実際に何が得られるのか」です。宗教の真の意味を探究する中

で、彼らが一致して焦点を当てるのは、具体的な宗教実践者としての人間です。宗教実践において、その人が実際にどのような行動しているのか、そこを見ているのです。私は、池田大作氏も同じ問題意識を抱いていると信じています。これこそが、そもそも私を氏に注目させた点なのです。そして、二〇一六年に東洋哲学研究所の前所長・川田博士とお会いしたことで、研究課題として池田大作氏を取り上げたいとの思いに最終的に拍車がかかったという次第です。

ウィリアム・ジェイムズと池田氏

先ほど触れた宗教心理学者ウィリアム・ジェイムズは、宗教研究の中心点を民衆 (people) に置きました。ジェイムズは一九〇一年から翌年にかけて、「宗教的経験の諸相・人間性の研究」と題する講義をスコットランドで行いました (エジンバラ大学でのギフトォード講義)。この講義に関する要点を三つ挙げてみます。

第一に、宗教的経験を研究するために、彼は一般の信徒がどのような宗教的経験をしているかがわかる

生の資料を収集しようと努めました。たくさん日記と証言記録、説教と祈り、その他、さまざまな宗教の普通の信者による宗教的経験が表現された資料を幅広くカバーしています。彼は、宗教的経験の資料の供給源を、神学的な諸教義の中だけに限定したくなくかつたのです。

ジェイムズは、宗教の真の意義は本人が自己自身の変革を体験する瞬間にあると考えていました。彼は、

No Image

ウィリアム・ジェイムズ

人々の宗教的経験がどのように彼らの実生活を活気づける火花となってきたのか、具体的な宗教生活において彼らがどのように変化したかを見つめました。そこに彼の宗教研究の核心があり、その変化の様相を彼は明確に示したかったのです。

第二に、人々のこうした生きた資料、いわゆる宗教体験資料の内容を伝えるにあたり、教義や神学用語以外の何らかの開かれた言葉が必要だと彼は感じていました。最も適切な言葉を探しているうちに、新しい科学として台頭してきた心理学とその言語に彼は着目しました。それらが実に魅力的に感じられたのです。こうして、人間の変容に関する宗教的経験をより深く理解するために、彼は心理学の用語を使うようになりました。人間の変容は突然に起こることもあれば、より段階的になされる場合もあります。彼は、人々が生活の中でどのように自己を変容させてきたのかを把握し、それを心理学の観点から表現しようとしたのです。

第三に、ジェイムズは常に読者に比較の見地を与えようとしてきました。読者自身の見方と宗教的経験をした

人の見方を比べることによって、より深い理解ができるようにしたのです。彼のどの著作においても、この「双方の観点」が維持されています。

私は、池田氏のさまざまな著作の中にも同様に、これら三つの非常にユニークで際立った特徴を見出しました。氏は特殊な哲学用語でまくしたてるようなことは好まず、普通の人間の根本的な自己変革体験を世界中の民衆に広く伝えたいと真剣に願っています。人間性を深く理解するために氏が焦点を当てるのは、生きた人間存在の中にはじける生命の火花であり、彼らが体験する自己変革のプロセスなのです。

この変容プロセスを、池田氏は教えを伝えるための宗教用語を使って表現していることもあります。仏教、キリスト教、あるいは他の宗教において、自己変容のプロセスは、それぞれの宗教用語を使って説明でき、伝えることができるのです。池田氏は、それに加えて、最重要概念たる「ふたつの自己」すなわち「大我」と「小我」について、心理学の基本用語を使って著作の中で巧みに解説しています。これらふたつの自己がどのよ

うに相互に関連して、宗教的経験の火花を発し、自己変容をもたらすのかを、氏は説明しています。

私が最も啓発されるのは、池田氏の著作の中の「対談」の部分です。氏の講義や講演は広く普及していますが、この「対談」の面にもっと注目しようではありませんか。氏は自分の意見を提示するだけでなく、対談相手の意見、そして読者ないし聴衆の意見をも喜んで受け容れているように見えます。対談を通して氏は、対話の相手だけでなく対話に耳を傾けている人々をも巻き込んだ「第三の空間」を創り出したいと願っているのです。氏と聴衆／読者との間に、生きた有機的空間のようなものがあります。対話を通じて参加者同士の交流が深まるのであり、このように池田氏は他者を理解する非常に強い感受性をもっているのです。氏は常に、対話に参加するよう聴衆／読者に求めています。が、これは対話というものについての氏の優れたセンスそのものを証明しています。

池田氏の思想に共感する人は、自分のことを単なる受け身の聴き手ではなく、氏との語り合いの参加者で

あると感じることでしょう。生き生きと相互作用する第三の空間においては、誰もが「自分もまた池田氏の対話の相手である」あるいは「自分もまた氏との語らいの参加者である」という感覚を経験し、実感できるのです。

これらの諸点は、ウィリアム・ジェイムズの宗教心理学の核心にあるものです。彼の時代には、「心理学」と「哲学・宗教」は明確には分かれていませんでした。宗教心理学は、宗教的経験を広く総合的に理解しようとする学問です。私は、ウィリアム・ジェイムズの非常に重要な弟子であり、宗教心理学の推進者であったグランヴィル・スタンレー・ホール (Granville Stanley Hall 一八四四—一九二四年) にも触れたいと思います。ホールは、日本の心理学の創始者である元良^{もとら}勇次郎 (一八五八—一九二二年) の指導教師でした。元良は最初にボストン大学で学んだ後、ホールが教えていたジョーンズ・ホプキンス大学に移りました。元良はホールの指導のもとで博士号をとり、日本に帰国して、学術界の新しい分野である心理学の発展に貢献しました。

私が理解しているところでは、心理学は東京大学と京都大学の宗教研究の部門にもさまざまな影響を与え、一九八〇年代までの日本は、人間の内面に焦点を当てた心理学の運動をリードしていたと思います。特に、「戦前を中心とした」京都学派はジェイムズの『宗教的経験の諸相』から非常に強い刺激を受けました。ジェイムズが重要な火つけ役だったのです。しかし、一九九〇年代までには、人間の経験のプロセスはほとんど顧みられなくなり、社会学的観点が甚だしく強調されるようになりました。今もなお、人間の内面の動的変容についての研究は、宗教学界において盛んでないようです。現在、ジェイムズが抱いていた本来の構想は、その後の心理学者によつて真剣に実行されてはいません。「宗教的回心」や「宗教的変容」について、最近の心理学者の理解は表面的で視野が狭いと思います。ジェイムズの著作をご覧になれば、宗教的経験の実に多くの異なる系譜が取り上げられていることがわかります。キリスト教の場合で言えば、聖パウロ、聖アウグスティヌスその他の人々が非常にラディカル

な自己変容を経験しました。ジェイムズは、仏教における宗教的経験の諸記述に何度も言及し、イスラームの事例についても多く書いています。彼は宗教的経験や宗教的変容というものを、ささいな心理現象として小さく局限したくなかったのです。しかし、残念ながら、彼の本来の構想はこれまで発展させられていません。そういうわけで、宗教心理学におけるこうした本来の理念を復活させるのが、私にとって内心のひそかな目標になっています。

宗教心理学についてのジェイムズの本来の理念から見て考察すべき宗教的経験として、池田氏の「人間革命」思想はまことに適切な対象だと考えます。学界でこの理念を復活させるのが私の秘めた宿願であり、池田氏の人間革命思想をウイリアム・ジェイムズの思想に結びつけようとするのは、そういう意図があるためです。現在の宗教心理学における量的研究〔複数のサンプルからデータを集め、現象を数量化して統計的に分析する「研究法」〕は、宗教的経験を説明するには、すこぶる不十分かつ表層的なものです。私はこれまで、宗教心理学

におけるいわゆる社会科学的方法にも広く関与してきました。しかしながら、私がつと強い関心をもっているのは、ジェイムズの本来の理念についてなのです。

「自己」と「再統合のためのシンボル群」

より具体的に言いますと、私は、「人間革命」に焦点を当てた池田氏の論考に関して、その参照資料となつたであろうものをいくつか考えてみました。「人間革命」は、仏教哲学に基づく用語というにとどまらず、日本を背景にした教団組織を超えて他の諸コミュニティと意思疎通するためのツールでもあります。池田氏は主に、ふたつの重要な学説を参照しただろうと私は考えます。そのひとつはカール・グスタフ・ユング（一八七五―一九六一年）による「自己」の解釈であり、もうひとつはトランスパーソナル心理学の研究です。⁽¹⁾

池田氏は、ジークムント・フロイト（一八五六一―一九三九年）との決別後のユングの研究を探究したにちがいないと私は信じています。ここで、心理学の歴史

なかんずく精神分析の歴史に触れますと、一九〇九年、グランヴィル・スタンレー・ホールがアメリカのクラーク大学にフロイトとユングの両者を招きました。しかし、これは結局のところ、ふたりの決別という結果をもたらすことになりました。それ以来、ユングは自分の道を進みました。しかし、フロイトからの導きを得られなくなつたため、彼は自身の学問研究をサポートし、彼ならではの存在意義を認めてくれる教師を必要としていました。そうした折に、彼はウィリアム・ジェイムズに会つたわけです。以来、ユングは学問的あるいは実存的な疑念に苦しんだときには、決まつてジェイムズに相談するようになりました。彼らの関係は非常に深いものであり、結果として、ユングの関心事は心理学のひとつの運動をリードするようになりま

す。私は、両者の関係は池田氏と師匠の戸田城聖創価学会第二代会長との強い絆に似ていると思います。

池田氏が参照したであろう第二の見解は、トランスパーソナル心理学に基づくものだと思います。これは、心理学と科学の新分野としてアメリカで発展した心理

学です。私は、これが池田氏の講演や対談に対し、きつと何らかの影響を与えたと信じています。お調べになればわかりますが、トランスパーソナル心理学の歴史に関するどんな文献でも、ジェイムズとユングをその創始者として挙げています。

池田氏とジェイムズの間にある直接的・間接的な類似性については、「より大いなる自己」と「より小さな自己」の関係に焦点を当てれば理解できます。両者ともに、内なる最奥部分相互のこの関係性を最も重要な問題として強調しています。これは宗教心理学の研究活動の中心にあるものです。

池田氏は心理学を専門的に学ばれたわけではありません。せし、自身を「心理学者」と呼んだこともありません。それにもかかわらず、氏がよく理解しておられるように思えることがあります。それは、「自己」について人々により深く理解させ認識させる説明をしようとするれば、現代の学問分野の中では心理学が最も適切な用語と概念を与えてくれるという点です。とはいえ、氏の思想や洞察を現代の世界に効果的に説明し伝えるための言

葉を、どんな種類の心理学でも提供してくれるかといえば、そんなことを氏が信じていないこともまた確かです。

ここで、「より大いなる自己」と「より小さな自己」についての氏の見解を引用します。これは、宗教心理学のコンセプトと親和性の高いものです。

「大我」に生きるということは、決して「小我」を捨てるということではない。むしろ「大我」があつて「小我」が生かされるということなのであります。

文明の発達というのは、人々に執着があり、煩惱があるからこそあるともいえます(中略) 仏教の一部では初期においても、煩惱をなくそうという考えはあり、そのために、肉体をも焼き尽くす試みさえ行われた。しかし、煩惱というものは、生命が本来もっている根源的な本体から発現して行くものであり、なくすことはできない。というより、行動の原動力でさえあります。ゆえに、この煩惱

にとらわれた「小我」を正しく方向づけることが、不可欠であります。

真実の仏教は今、その根本の「大我」を発見した。「小我」をなくそうとするのではなく、逆に「小我」にとらわれるのでもない。「小我」をコントロールし、方向づける「大我」のうえに立つてこそ、文明は正しい発達を遂げると言いたいのであります。⁽²⁾

池田氏の「大我」の概念は、ウィリアム・ジェイムズの「より広大なる潜在的自己」という見解に似ています。またトランスパーソナル心理学における「超自己 (super-self)」の解釈とも比較できるでしょう。同様に、池田氏の「小我」解釈は、ユングの「自我 (ego)」解釈に見合うものです。いずれにせよ、最も早く現れたのは自己についてのジェイムズの見解であつたといえるでしょう。

「近代的自己の断片化」に対する池田氏の批判点は、ジェイムズの見解だけでなく、ユングの見解ならびにトランスパーソナル的な自己概念ともほぼ同じです。

ジェイムズの「より広大な、あるいは潜在的な自己」、ユングの「自我を超えた自己 (ego)」、トランスパーソナル心理学の「超自己」は、池田氏の自己観に見られる「大我」に相当すると考えられます。それらは一様に、今日の人類社会に顕著な「断片化された自己意識」を修復し、ありうべき「全体的自己」へと向かうことの大切さを強調しています。ジェイムズとユングの両者にとって、そして仏性に言及する際の池田氏にとっても、この自己回復のプロセスが根本のところまで表しているものは、宗教ならびに精神的次元への回帰です。より深く、より広大で、より充実した人生——それは超越的自己に伴うものです——を我々は目指すべきであり、そのためにはこうした回帰が必要なのです。さて、どうすれば我々の断片化した自己を根本的な自己へと再び結合できるのでしょうか？ 言い換えれば、「より大いなる自己」は、どうすれば断片化した自己を有機的・相互連関的に結びつけることができるのでしょうか？ この問いは、宗教心理学者たち、なかならずウイリアム・ジェイムズにとって根本的な課題

でした。彼は、断片化した自己を再統合するための媒介として三つのシンボルを挙げました。宗教、芸術、そして対話です。三番目は、人間との対話だけでなく、自然や書物との対話、自己の統合を進めるために（自己との対話として）文章を書くことも含みます。これら三つは、断片化した自己が全体的につながり合えるためのシンボルとして機能するのです。

宗教心理学と宗教間対話

ウイリアム・ジェイムズとカール・グスタフ・ユングに関連して言えば、対話には四つの段階がありうると思います。これら四段階は、「宗教間対話のために、宗教心理学がどのように貢献するか」を考える際に役立つものです。

最初の段階は、単に「自己紹介」するだけです。つまり、各人がそれぞれ「小さな自我 (エゴ)」として出会うわけです。この段階では、お互いが何を順奉して生きているかを伝えます。たとえば、私はキリスト教徒である、あるいはプロテスタント信徒であると明確

にし、一方、皆さんはSGIのメンバーであるとか、仏教を信奉していると明らかにします。これは「より小さい自己／自我」同士の出会いです。

その後、私たちは「内省」というもうひとつの対話を始めます。これが第二の段階です。この自己内対話は、自己のより深い次元を見つめることであり、小さな自己を大きな自己へと向かわせます。この段階で確認するのは、これまでの相手との対話がどのようなものだったか、その相手との対話を続けられるかどうかです。このように、自分自身に問いかけるといってもひとつの旅を始めなければならないのです。

続いて、深層の自己に対して、他者とつながるよう求めます。これが第三の段階です。第一と第二の対話がいままでなされていけば、他者と関わる第三のプロセスを実行できるのです。

比喩的に言えば、これは結婚や恋愛における関係性のようなものです。まず、知らない人と出会ったあなた、相手についてさまざまなことをチェックします。どの宗教を信仰しているのか、経済状況はどうか、ど

んな家族背景なのか。相手のことがわかってきたら、今度は、その人と対話／交際することが妥当かどうか自問します。そして、深い自己内対話の結果、相手と対話／交際相手として認めるといことになります。しかる後に、より深い自己が自らを開いて、相手を理解する作業を始めるわけです。両者は強い結びつきをもって、内なる自己への旅を本格的に開始できるようになります（第四の段階）。こうして宗教間対話の最初の一步が踏み出されます。

私の理解しているところによれば、池田氏の対談や諸大学その他の講演にも、これら四段階が見られます。最初の段階では、氏は大我について話したりせず、聴衆や対談相手との関係をつくることに努めます。その後で、大我に関する、しかるべきレベルの話へと人々を引き入れていくのです。

対話の第四段階にいたって、私たちは「さあ、一緒に進みましょう」と言いながら、内なる自己あるいは大いなる自己に関して、適切に探求できるようになります。私はこれこそ「平和運動にとっての核心部分」

と考えています。だからこそ池田氏は、宗教間の対話とともに「芸術や文化の交流の重要性」を強調するのです。これは、人々がくつろいで対話できる「第三の空間」を氏が創出するための方法のひとつです。人々を対話に参加させるためにウィリアム・ジェイムズ、スタンレー・ホール、カール・ユングが提唱したのも、まさにこのやり方なのです。

池田氏は、人類がもつ内的・外的な暗黒面や心にトラウマを刻みつける残酷な面でさえも包み込む、信じがたいほど強い能力をもっています。たとえば世界大戦であり、決して忘れることのできない人類の悲劇です。氏は、これらの悲劇の数々をも内面に取り込んで、新しい自己を創造しているように見えます。大我への内的探求そして根本的自己の発見が、氏を促して世界平和のために語らせ、運動を展開させているのです。

私は、創価学会の沖繩研修道場の話をうかがいました。沖繩は、日本において民衆が最も悲惨な体験をした地のひとつです。研修道場は、そうした深い傷を負った自己をも内面に取り込んで同化し、新しき自己を

創り出すシンボルになっています。⁽³⁾ この道場の設立は「自己の新生」のためであり、平和運動の一環であったと私は考えます。私を知るかぎり、師弟の絆に生き続けていく池田氏の全生涯は、この運動に捧げられました。氏は、人間性のネガティブな側面をも内心に取り込んで、自身のメッセージを個人の内面に向かって、また集団に対して、そして地域的、国家的さらには宇宙的なレベルで伝えていく大きな能力をもっています。氏の著作はジェイムズ、ユング等の作品と深く通じ合うものであると言いたいと思います。

暫定的な結論

ここまでの考察に基づき、暫定的な結論として、ふたつの観点を示しつつ池田氏を宗教心理学者と呼びたいと思います。すなわち、池田氏とウィリアム・ジェイムズの間には明らかに多くの類似点がありますが、私は池田氏に関するさらなる研究のために、ふたつの設問を提起したいと思います。

ひとつ目は、人間革命に関する池田氏の議論におい

て、急激な回心についてはさほど強調されていないということ。一見すると、池田氏は師匠・戸田城聖氏のような劇的な体験はしていないかのようです。氏は、むしろ漸進的な自己変革により注目しています。それゆえ私は、師が牢獄で体験した急激な回心ないし悟達を、池田氏がどのように理解しているのか探究したいと強く思っています。宗教的経験に関して、師匠の体験を氏がどのように体得し継承しているのかを知りたいのです。

第二の探究点は、人間のタイプに関連します。ウィリアム・ジェイムズによれば、人間にはふたつのタイプがあります。「病める魂」のタイプと、もうひとつは「健全な心」のタイプ、あるいは「確固たる意志をもつ」タイプです〔『宗教的経験の諸相』第四・七講に詳述〕。私は創価大学のキャンパスで、ウォルト・ホイットマンやラビンドラナート・タゴールなど多くの「健全な心」のタイプの人物の彫像を見ました。これらの像を見ながら、私は人間の「病める魂」のタイプについての池田氏の見解を知りたいと思った次第です。

今回の私の考察で明確な結論を出すことは到底できませんが、それでも池田大作氏とウィリアム・ジェイムズの親近性についての研究の一里塚にはなるかもしれません。池田氏の思想をより深く理解し、宗教心理学者として素描しようとするれば、現在すでに数々の良質の資料があります。本日の私の所見が、読者の皆さまがより良い世界へ向けて結束しゆくためのお役に立てれば幸いです。

原文英語。〔 〕内は邦訳に際しての補注

原注

(1) トランスパーソナル心理学は、人間の経験の超越的な側面と現代心理学の枠組みを統合した心理学の新分野である。意識、スピリチュアリティ、人間の自己成長に関する研究に貢献してきている。

(2) Daisaku Ikeda, 'The Enduring Self: A speech delivered at the University of California, Los Angeles, 1 April 1974', in *A New Humanism: The University Addresses of Daisaku Ikeda* (New York: I.B.Tauris,

2010)、140. 池田大作『21世紀文明と大乘仏教——海外諸大学講演集』一九九六年、聖教新聞社、八九—九〇頁。米カリフォルニア大学ロサンゼルス校での講演「21世紀への提言——ヒューマニティーの世紀に」(一九七四年四月一日)より。

(3) 創価学会沖繩研修道場は、一九七七年、米空軍の「核ミサイルメースB基地」跡地に建てられた。池田大作氏の発案で、敷地内のミサイル発射台を解体せず、戦争の恐怖を永久に思い出させるものとして残した。こうして発射台は、六体のブロンズ像が建つ記念建造物「世界平和の碑」に生まれかわった。

(Chae Young Kim / 韓国宗教学会前会長、西江大学教授)